

180 170 160 150 140 130 120 110 100 90 80 70 60 50 40 30 20 10 1

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

昔語賀屋庫卷之二

東都

曲亭馬琴演

金龍齋

第三

曾我十郎衛乃小袖

忘れて年を経てゆきを。友切丸の言譯と。まくみじかぞうわき。  
抑是れ曾我十郎祐成小二世と実り大礪の虎ヶ夫の像見と。持  
佛堂の柱よ掛軒よタヌキ高らど。向あけし今様小袖ハ丈幅の  
縞縑紋。蓑よ帽額の外小摸様を。小侍よた證據あらば  
アセバ。規ろ木の凝へとひやと。ある人千鳥を。縫せう。十郎ねの  
衣裳と。うさぎうさぐれ。千鳥をつけ。五郎どの衣裳と。蝶を  
はく。うさぎうさぐれ。蝶を。何の。よ。小蝶と。衛をつくる。うさ  
ら。うさぐれ。そ當初曾我兄弟が。被だれ。と。只違へ。蛇小足を添。

とらひかることをやひはうん。漢土りまらむ日本をも。假名冊子作るリのふ。  
但見といふとあり。辟衣が貴婦老弱の形容小。そのあどくを呂ひよす。  
夜裳の風流。袴下龍襲のきまでも。ぐくに小書ちよとふ又据え兒  
ゆめ竹と。時宗どのが童みよ。相根山小をひやうとたの鹿小秋楓の  
そらぎ。ゆふ。染衣ひじのタゞれを竹とよといふ。秋のゆよ令つたら。小説作者の風流  
ぞめ。ちうるよ耳を信ぢるやのき。件の衣を相王づらが。寒小被なうんと  
ぬふやまが。まづくら小筆を取る。その日。の日記だよ。記し漏さくが  
えうふよ。五十年も百年も。昔の人の一代の物語が。傳わらん。衣裳小深た  
る摸様まよ。漏さくと傳ふるト。めうんア。祐成やの大磯かひふ。千鳥  
の小袖と呂ひよす。おひひうす。妹が。よレが。冬の夜の川風さむ。  
千鳥鳴く。うり。とらふたあのかうを。石く。ちうも。むかひ大磯の里  
すあめうど。ちう。小後の生好み。が。實小衛の摸様せ。衣を被はうんと  
ぬひよ。そて。緑よ衛を縫ひ。ゆゑ。真の好事。あれ却疑ひ。女と摸様  
実代似じ。レ。の。搾翁の。まよ。しが。後。小縫の。まよ。小縫と。翁こ  
二様。すれども。亦。その。ちよ。縫肝が兼て。翁をまく。搾翁を。すい。  
喝る。うと。建久時代。よこの縫ひ。ゆと。不審。と。肩うち。肇らて。あく。疑  
ひを起。と。やら。真実ゆの像見の衣の。殿物。よう。朽を。き。ひとと  
の推量。まよ。又。らの。翁を。八丈。翁と。喝れば。伊豆の漁。まよ。と。八丈。翁  
あり。と。今。の。眼。りよ。りよ。へを。そ。迷ひ。小竹。じ。ハ。丈。翁と。喝。い。

八丈の鳴絹（めぐら）より作（さく）。とてうり尾張圓（まんじゆ）を織出（おりだ）せり。のと。長サハ丈（さか）ある  
余よハ丈絹と唱へり。されば治承五年五月のぬ。十郎藏人行家が。河  
國（くに）より。伊勢二所の大神宮（だいじんぐう）へ送（おもて）て奉る御幣物（ごひめもの）。美紙十帖。ハ丈絹二  
匹（ひき）とある。東鑑（とうかん）卷二 美紙（びし）ハ今（いま）の美濃紙（みのり）。ハ丈絹の尾張の名物（めいぶつ）。二行（ふたぎ）  
鄰（となり）の酒産（しゅさん）なり。又時家（ときけい）どの衣裳（いじょう）。蝶（ちょう）をつけたる當初（とうしょ）の小説作  
者（しやくしゃ）が滑稽（はつけい）なり。河津（かわづ）も曾我（そが）も蘆原（らわら）。平氏の家の紋（ふねのあしん）とある。蝶  
をほくべたうひらうねど。時宗（ときむね）どもの時政（ときまさ）の鳥帽（とりばし）。又四つ目  
つ。彼北條の家の紋（ふくじのあしん）。三鱗（さんりん）。又行（ゆき）すれど。姓（성）は平朝臣（へいきみん）なり。この事（こと）を  
かの所縁（ところねん）をとて。さて蝶（ちょう）をつける。その鱗（りん）をばとらざと。  
蝶（ちょう）をつくる。又所（ところ）あり。北條ゆの鳥帽（とりばし）。又四つ目。曾我（そが）を名告  
時宗（ときむね）どもの鱗（りん）をつけたうひらうと似（そ）け。平氏たる北條の蝶（ちょう）。元末由  
ある紋蝶（もんちょう）。又御の財（ざい）もす。昔の作者（じしやくしゃ）のうるど後の人（ひと）のうるど思  
り。又朝夷（あさひ）の鶴の紋（のんのあしん）。小林と稱（こばやし）。昔初（はじ）て朝夷（あさひ）小林（こばやし）。能  
優（すぐ）が紋（のん）。別号（べいごう）。又トトロ。とてくとも人（ひと）もちうられど。の據島（のつきしま）の摸様（もくよう）  
ミリナガラス（ミリナガラス）が朽（く）をく。やひあまうとあれなれど。とあらざる人のみ。からん  
ゆと吉長（よしろう）。と笑ひあふ。あらのうらと大磯の。亮（あきら）かすらと化粧坂（けうげいざか）の。歩  
原源太（はらげんた）とんどあらと。あらのうらと大磯の。亮（あきら）かすらと化粧坂（けうげいざか）の。歩  
の亮（あきら）かすらと。時宗（ときむね）どものをりと。とあらのうらと化粧坂（けうげいざか）の。歩  
ゆと子越（こごし）の。がねと。とアラのうらと化粧坂（けうげいざか）の。歩  
を。じかの作者（じしやくしゃ）がつうとうえ。化粧坂（けうげいざか）ともをせうるべ。されば子越（こごし）のゆ

將ハ曾我兄弟が仇殺の夜。黃瀨川の龜鶴<sup>カシマツヅク</sup>をも。乙孫祐達<sup>ヨウダツ</sup>が井<sup>アメニ</sup>の特屋<sup>カツヤ</sup>小竹<sup>カタタケ</sup>。吉備津宮の大蒜<sup>オニヒニ</sup>内<sup>ナカニ</sup>有<sup>リ</sup>。酌<sup>タマシ</sup>をとく。枕<sup>カシマツ</sup>をもぐ。夢<sup>アメニ</sup>度<sup>カシマツ</sup>あらざ<sup>ル</sup>。臥<sup>カシマツ</sup>りしが。彼胞兄弟<sup>カミツシキ</sup>が。讐言<sup>カミツシキ</sup>。歎祐<sup>カシマツ</sup>達<sup>カシマツ</sup>を響<sup>カシマツ</sup>ひかす。と喉<sup>カシマツ</sup>ご声<sup>カシマツ</sup>よ<sup>リ</sup>響<sup>カシマツ</sup>ひだる。臥<sup>カシマツ</sup>り。夜討<sup>カシマツ</sup>入<sup>ル</sup>。と叫び<sup>カシマツ</sup>。ありとまことに告ぐるやう。ま<sup>リ</sup>祐成<sup>カシマツ</sup>が。虎<sup>カシマツ</sup>と相馴<sup>カシマツ</sup>。とくふす。懼<sup>カシマツ</sup>う。證文<sup>カシマツ</sup>ゆき。虚言<sup>カシマツ</sup>ゆき。あらねども。好色<sup>カシマツ</sup>のと爲<sup>カシマツ</sup>。違<sup>カシマツ</sup>へて。是<sup>カシマツ</sup>ハ九ツ牙<sup>カシマツ</sup>の儀<sup>カシマツ</sup>。小七歳<sup>カシマツ</sup>と云え<sup>カシマツ</sup>。と。父の仇人<sup>カシマツ</sup>を殺<sup>カシマツ</sup>んとく。葦<sup>カシマツ</sup>小弓<sup>カシマツ</sup>小木<sup>カシマツ</sup>カタ<sup>カシマツ</sup>。候<sup>カシマツ</sup>初<sup>カシマツ</sup>の事<sup>カシマツ</sup>を打<sup>カシマツ</sup>ふも。との事<sup>カシマツ</sup>のみぞひ忘<sup>カシマツ</sup>れど。稚<sup>カシマツ</sup>きとく。小矢<sup>カシマツ</sup>の如<sup>カシマツ</sup>。況<sup>カシマツ</sup>てへとく。色<sup>カシマツ</sup>を好み。漫<sup>カシマツ</sup>小括<sup>カシマツ</sup>里<sup>カシマツ</sup>小括<sup>カシマツ</sup>び<sup>カシマツ</sup>づれ。揚代<sup>カシマツ</sup>小弓<sup>カシマツ</sup>け<sup>カシマツ</sup>す。家傳<sup>カシマツ</sup>の體<sup>カシマツ</sup>。逆澤深<sup>カシマツ</sup>を質<sup>カシマツ</sup>。置<sup>カシマツ</sup>虛<sup>カシマツ</sup>氣<sup>カシマツ</sup>の、祐成<sup>カシマツ</sup>うらぶ<sup>カシマツ</sup>い<sup>カシマツ</sup>を大歎<sup>カシマツ</sup>を響<sup>カシマツ</sup>ひん。世<sup>カシマツ</sup>より<sup>カシマツ</sup>曾我の逆澤深<sup>カシマツ</sup>。ありとどり<sup>カシマツ</sup>に體<sup>カシマツ</sup>す。腰<sup>カシマツ</sup>うら<sup>カシマツ</sup>。胸<sup>カシマツ</sup>一段<sup>カシマツ</sup>白<sup>カシマツ</sup>毛<sup>カシマツ</sup>を水<sup>カシマツ</sup>小<sup>カシマツ</sup>威<sup>カシマツ</sup>口<sup>カシマツ</sup>を。かく<sup>カシマツ</sup>うそ<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>喝<sup>カシマツ</sup>た<sup>カシマツ</sup>。又古老<sup>カシマツ</sup>の說<sup>カシマツ</sup>。小<sup>カシマツ</sup>菱<sup>カシマツ</sup>威<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>。櫻<sup>カシマツ</sup>子<sup>カシマツ</sup>。澤深威<sup>カシマツ</sup>の事<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>。菱<sup>カシマツ</sup>を割<sup>カシマツ</sup>。継<sup>カシマツ</sup>た<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>逆澤深<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>。や。又<sup>カシマツ</sup>は又<sup>カシマツ</sup>世間<sup>カシマツ</sup>小逆澤深<sup>カシマツ</sup>から<sup>カシマツ</sup>一<sup>カシマツ</sup>身<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>。夢<sup>カシマツ</sup>う<sup>カシマツ</sup>も<sup>カシマツ</sup>ほ<sup>カシマツ</sup>。理外幻境<sup>カシマツ</sup>うれ<sup>カシマツ</sup>ば祐成<sup>カシマツ</sup>。や。花街<sup>カシマツ</sup>が<sup>カシマツ</sup>ひと<sup>カシマツ</sup>。情慾<sup>カシマツ</sup>の渦<sup>カシマツ</sup>ま<sup>カシマツ</sup>を<sup>カシマツ</sup>。作<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>う<sup>カシマツ</sup>。作<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>ね<sup>カシマツ</sup>べ<sup>カシマツ</sup>。と<sup>カシマツ</sup>。強<sup>カシマツ</sup>小<sup>カシマツ</sup>情<sup>カシマツ</sup>を<sup>カシマツ</sup>り<sup>カシマツ</sup>り<sup>カシマツ</sup>。萬<sup>カシマツ</sup>を賣<sup>カシマツ</sup>るの<sup>カシマツ</sup>う<sup>カシマツ</sup>。サレ<sup>カシマツ</sup>ど<sup>カシマツ</sup>う<sup>カシマツ</sup>。よ<sup>カシマツ</sup>う<sup>カシマツ</sup>。らのう<sup>カシマツ</sup>を<sup>カシマツ</sup>り<sup>カシマツ</sup>る。ま<sup>カシマツ</sup>ひ<sup>カシマツ</sup>。昔<sup>カシマツ</sup>の<sup>カシマツ</sup>路<sup>カシマツ</sup>女<sup>カシマツ</sup>何<sup>カシマツ</sup>ゆ<sup>カシマツ</sup>。今<sup>カシマツ</sup>の<sup>カシマツ</sup>路<sup>カシマツ</sup>女<sup>カシマツ</sup>小<sup>カシマツ</sup>品<sup>カシマツ</sup>う<sup>カシマツ</sup>。側室<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>う<sup>カシマツ</sup>り<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>。妻<sup>カシマツ</sup>を<sup>カシマツ</sup>辭<sup>カシマツ</sup>。平相國<sup>カシマツ</sup>小<sup>カシマツ</sup>儀<sup>カシマツ</sup>れ<sup>カシマツ</sup>に<sup>カシマツ</sup>。祇王<sup>カシマツ</sup>。又<sup>カシマツ</sup>義<sup>カシマツ</sup>。判官<sup>カシマツ</sup>の立<sup>カシマツ</sup>。靜<sup>カシマツ</sup>。平重衡<sup>カシマツ</sup>と<sup>カシマツ</sup>慰<sup>カシマツ</sup>め<sup>カシマツ</sup>ま<sup>カシマツ</sup>に<sup>カシマツ</sup>。千壽<sup>カシマツ</sup>う<sup>カシマツ</sup>。ど<sup>カシマツ</sup>悉<sup>カシマツ</sup>あ<sup>カシマツ</sup>く<sup>カシマツ</sup>ス<sup>カシマツ</sup>。



大殘の席 祐成か村死  
せひよ木と再び承る如

大のそら



かく。虚実ひ見えりの。取捨よみふれり。手筋を物頗よ。らひ跨  
たる人へ動さればひしの。手女を今の。持君小引くべく。仇を討しとく  
窓み社士が。きを好て花街か通ひ。志も禱うんさる。ひざみふくら。彼若  
達へ行も猶まれど。只同流の理を推へ。その才の短くへかの。一本石小ゆゑ。  
仇人の所在ぢれど。あを。索ひわざれ。殺す。乞をば絶え。えうべぐえ。  
され仇へ威勢ある。稽神す。ちくも眼前よあり。これが切を放せん  
す。まほの誘引ふま。小托女向抱子を。嫌ふべからず。あつるふ虎  
女流うれど。べをあるの方あれば。う席もあき。隨ふ。祐成を以  
りうとど。祐成が。あい。小志を。福とだ。仇討ふと。身の  
大りを告げられ。今れむと。おひと。後。恨も痛。一ノ。後。而後て後  
者と。ゆく。虎へ像見を。かしこ。又。一説。小大盛の。虎の。相模國諸越  
の里か。生れ。うと。乳名を。於虎と。喰。後。虎と改名を。と。うと  
縁故を解。うと。於虎の異朝。楚國の。方云う。虎の。ふと。又。諸越の里。  
諸越。原。昔。相模の。名所。を。承。歎。よと。の諸越を。唐山。よりて。移る  
も。うと。されば。人唐山。家集。よ。「あづま峰の。りう。二の里。よ。」  
「きねを。アカラ。の。う。む。と。り。くらん。や。の。じ。と。不。それ。ど。むそく。く。好。ふ  
の。う。う。と。う。あ。りん。送。あ。物。よ。記。セ。を。え。せ。ら。う。と。そ。そ。彼。曾。我。見。才  
。あ。ん。サ。そ。つ。さ。ぶ。ん。あ。ち。う。あ。ん。ふ。ち。ヨ。う。と。う。ん。さ。い。き。を。え。ま。と。ま。う。リ。  
南家の祖。左大臣。藤原朝臣。武智。廢。の。四。男。方。參。義。從。三。侍。て。廢。宮。の。  
後。胤。小。竹。主。乙。廢。ト。リ。十。代。の。孫。伊。室。國。押。領。使。維。職。そ。の。子。耕。持  
九。郎。維。次。そ。の。子。役。野。四。郎。火。夫。家。次。そ。の。子。役。五。位。下。太。郎。大。夫。祐。家。宣。入  
ハ。ス。津。見。八。道。寂。蓮。う。子。す。り。祐。家。が。よ。竹。津。二。郎。祐。近。ハ。み。ど。や。三。

あ。河津六郎祐道祐真。伊東九郎祐忠と大系國よりええひれど東  
監小由と。伊東二郎祐親。その子河津三郎祐泰。伊東九郎祐清  
より祐親入道。河津の莊を祐泰が譲り。その弟伊東の  
在小堺。さればうち小河津と稱し。後より伊東二郎とりふる。又  
大系國より祐真とりふりのを戒められ。祐信を惣小作  
主らふや不審。やれば祐成時寄らて廢臣とす。十五世相続の未嘗  
スニ蘿祐孫も母子を助くるて麻呂吉八代の孫遠江權守  
み憲。うち木ユ及ぶ補せられ。木ユのユと蘿原の蘿と合  
て。よ孫エ蘿と号し。内憲の子後五位下時信。その子維景。小僧う  
その子維職。その子維次。以上あり。その子俊邦に郎大夫。次。その子  
武者所祐次。その子ユ蘿を勧め。尉祐龍。その子左尉門尉兼大和守  
祐時。乳名を大身丸と。祐時の先。六郎を専門尉祐長。木。一龍。又  
維兼ひ。駿竹舟時信とりひ。伊豆國伊東よ住と。うそ伊東と  
号す。され伊藤エ蘿の祖も。とくれど大系國よりとうべ時信の二階  
堂の祖。やへ祐成時。島。乙麻呂。とよき。十七世相続の末葉ある  
北條と蛭小嶋。田方郡。小属。蛭小嶋。うそ。狩野川を渡り。また  
三嶋へ。ゆづらの邊。小野。久茂光の居る。又曾我の莊。河津  
國足柄郡。とよき。鳴立澤。遠め。今。今。大城の山。とくらむ。鳴立澤  
と唱へ。やれど彼西行上人の。秋の文。と詠る。どうの如く。あくび。し  
又中村の餘綾。郡か。ゆま。小城と酒匂の間。うれど曾我へ。遠い。昔  
ハ曾我中村。とうらう。とて唱へ。今の中村。ひりの中村。小。あら。戦

うれらへるに應れ候。建久四年六月七日。お軍寡朝駕す。兼  
金く還向せぬ。小曾我太郎祐信御書よ候。處路次より職を  
あつ。刺曾我の莊の乃具を免除し。祐成時宗が夢後を弔だ  
ら仰り。されば彼等が勇敢の意氣を感せらる。ふうと  
ありと東籬よ哉。とをうなづく。人の世よ在る。七十稀まん。  
て世をやうゆ。との胞兄弟の如くあらが。羨むべからず。や時宗ね  
を。神よキラリ。勝名明神と号すが。神社と相模國より。又東海  
道より吉原と蒲原の間。草薙とりの不ふ。彼兄弟を神よキラリ。  
八幡と号する。又原源より。ひよ。又澤とり。而も泉福寺とり。  
蘭菴作。よ祐成時宗の墓。十郎の法名。高崇院良雪  
大禪定門立郎の戒名。香山良富大居士と志して。ア  
との法名。後小ほ多たるのうべ。や千鳥の摸様のうべ  
と。怪もあらん。公はまよくちかく。と教す。とあらす。小舟乃  
ほどあくとひへ。相模能吏。鄙びても。塵とぞえぬ古小袖。水際  
そぞう舞す。裏寄耳を側だ。

#### 第四 諸葛孔明が陣大鼓

造處小道具棚の下段。滾くと輒ひ勢のアクリ。その形。彼源  
頗が。あろひ。井のどらのうべ。と。大桶。す。あら。と。又温公が石を起して。故世の方を頭。の。水瓶。す。あら。と。方小屋。羊  
琇。が。手と。小獸を。驚。と。責。炭。翁。が。金。を。い。と。炭。取。と。よ  
り。ふ。似。れど。真。黒。よ。目。鼻。分明。と。大。廣。く。と。鎧。を

打と耳をくと洗ふ等。衆皆ひまごとの名をあらねば。ひらうちまわ  
アア席をうなづく。のりの席上小磯と推す。西國詔との譜声をう  
ト。これらとの質庫へ新象の力のすこ異國の名器すれべ。名牛らぐへ  
あまくろくろん。これへ唐山ニ圓のとだ。後漢の諸葛忠武侯孔明小  
私藏せられて。南蛮をも名を裏せし。陣大鼓よりいどむ。漢象ふ  
にび奥さる。天命限をゆれば是非よ及ばず。惜うる孔明。ハ五丈原  
の事と消ゆ。程よ僅は十あまり六七を数。魏の大將鍾會せ里  
艾す。攻撃され。姜維が武畧を防ぐ小さく。薦周が學才も用ひ  
小可す。後帝阿容こと。魏小陰系。内へ帝第五のちんす。北地王  
劉謙孔明が子諸葛瞻。あをくぶかとうて義をす。耻をあらめ  
罰の當にど。をもく化の宝とす。晋よりキテ。唐宋の世よは  
らき。蒙古胡えの時から至まで。春秋の宝とす。人を羞恥の  
使杜せ忠が私よ竊よたよ。博多の津小森。とおまき。それもと彼  
く。りとえぐに分野されど。これら大鼓の身めあれば。搬ひをあうれ  
がち。ゆえ。のり。と。も。罰の當にど。をもく化の宝とす。晋よりキテ。唐宋の世よは  
らき。蒙古胡えの時から至まで。春秋の宝とす。人を羞恥の  
使杜せ忠が私よ竊よたよ。博多の津小森。とおまき。それもと彼  
く。りとえぐに分野されど。これら大鼓の身めあれば。搬ひをあうれ  
の物もひまを。とくとく。差しとくと。せんくものとひだよ。王城の地を購ふ  
そ。ま。平安京を歴覧し。おそ吉野の皇后を拜見て。且く大和が旅宿を  
立てる。家傳本を知りのあられ。古物とみと称せられ。里見主親父が若黨  
某甲が内侍の女の童を誘引出でし。比人肉経紀。又畧賣され。其よ  
この身を沈やう。里見が家業の情慾。おもと。ちと。どへく。

孔明が陣  
大鼓の事  
南蠻子が  
西遊記小  
載さり

質相と称すらる。諸葛武侯の送物うれどもせず。伯樂あらざれば。  
馬骨か等へん馬の皮張りて。弓矢と刀のもの。されば中葉用  
唐の物。併れ一因にせよ安く。多ひ煩。邊は東堂也。雪のやへも寒か  
らざりし。愁古器と同利されども。せの重宝とす。すくもだん。か質庫  
の穴船屋。莊すが所謂散本を。羨めどもそのやひす。さべて。痴鼓。  
原軍器うちども。北狄の樂よ。あらむらこれを用ひ。後中國ふう  
びりまよ。今のかべらの樂器とまうね。やまと痴鼓。殺伐の声す。これ  
を樂器とぞいじ。とく。とく。か世の中都。あらぐ。と漢の博士。咳たれ。  
されば。とも上吉ハ僧あれ。痴鼓を鳴らす。禁められたり。例もあれど。  
今ふ至ども。是非を論どば。もあく。某ひ。諸葛武侯。小徒ひ。  
ヘのころも。些そと。辨たど。各位へり。小ちりひ。彼劉玄徳。之漢  
景帝の玄孫。中山靖王の後す。後漢の獻帝。既に。曹丕。小移  
され。ひ。漢の祚の絶ん。を悲。と。衆小推すれど。已と。と。ひ。ど  
天子の位。小即ゆ。在位僅。二年。す。向帝城。ゆ。崩。且。タ。ク。  
謚。昭烈皇帝。と。す。太子劉禪。ゆ。位を嗣ぎ。ひ。が。以。て。ろ  
賢。ク。伏。を。ひ。う。伝臣黃皓。木を。籠。愛。遂。す。士。び。の。小。り。う。  
あ。れ。ぐ。の。漢の正統。み。き。ひ。そ。う。されば。後帝。と。も。又。帝禪。と。の。稱  
す。ぎ。き。を。後。の。掌。者。に。只。舊。文。か。あ。ら。ひ。て。改。り。昭。烈。を。先。主。と。し。  
え。ん。帝。禪。を。後。主。と。と。き。し。る。唯。綱。目。の。一。書。よ。至。そ。う。く。の。理。と。辨。と。  
漢の獻帝の末。よ。附。る。後漢昭烈皇帝。章武二年。と。あ。り。ふ。あ。と。ど。  
あ。れ。帝。禪。を。後。主。と。書。されば。後。の。隸。を。脱。と。ふ。う。た。この。ち。え。ふ。至。す。  
さ。く。ひ。う。り。會。稽。の。楊。維。禎。が。正。統。の。辨。ひ。昭。烈。を。尊。む。こと。理。義。

楊氏か  
正統辨  
輟畊錄  
卷四  
元亨

分明あり。さうりて明の掌士ホ昭烈帝禪を天子の正統と定めた  
事よ羅貫本が二國志演義よりは改りて蜀の先主後主と写  
したる夫主と君の次の稱すと周礼よ主と君公と大夫をりとす。  
又礼記礼運よりは仕事と臣とくらひあはよ仕事と僕とくらひとくらひ  
とくらひ。君よ對するの稱すと僕とくらひ主よ對するの稱す。これかうと  
えど天子よものて主従と稱せばの謂す。それが安徳の成都よ天子の  
位よ即ちひてこれを昭烈と謚す。惠陵のみさとよ葬まされば。初  
敗綱工とす。帝禪ハ魏よ降る。安樂公よ封せられん。此を失ふの君て  
成敗よ就とくらひ帝と称すの義すと呂后のものうべれど魏ハ漢  
の賊す。後せりうで彼が封爵を唱す。帝禪を安樂公とぞべき。亦  
彼曹丕が獻帝を推あつて山陽公又封せしよかうと呂后的謚すと  
余よ帝禪と稱せらひ。これを後主といひ。或よひて稱りべつひと  
されば晋の陳壽が二國志を撰ひて先主後主の名を「創」す。  
よること常璩が蜀志す。あはれみちがひ。やへ陳壽が二國志す。  
鍾會が蜀将を會す。篤よ。昭烈帝を敗じて益州の先主とある  
者をつぶよ。小先主の名のうまつむれ。晋の魏を篡ひ吳を亡  
じて三國を并へてあり。天よ兩の日あく。地よ兩の皇帝す。されば  
晋よものか何とひひ。今千載の後す。すれどこの稱み俗みを  
りふぶ。又漢を改め。蜀とせらひ。陳壽が手よせ。黄氏  
が日抄とりひ。蜀の名す。國の名す。ゆうと昭烈帝  
漢とて称す。あはれ蜀と称すは。是の孫權とかく。魏

賊を討んと盟ひゆいとれたも漢とテモ稱あひよされ。これを蜀とりか  
め。魏人の所をも。被昭烈皇帝の漢を嗣ゆへを憎む故よ。イチ  
劉氏漢の正統を絶まし。せりひ漢とりひとと忌む蜀とへ名づけ。三  
つ。あつち小後の文人墨客の陳壽が當時よ門枉まがを曉らし。杜子  
美が詩といふ。あれ蜀主と稱したま。かく義よ仗理を知るの掌  
者といふべからず。明小至アマサヤ。の理を曉るといふ。すな蜀  
漢と唱うりのあり。前漢後漢小紛もんとと厭り。漢末とも。季  
をり。百歩を失ふの恐ひ。今の君主は曹氏。魏司馬氏。晋の臣小  
あらど。況て日本人へ。あらど。ちくゆきをうは。魏と晋よ門衆よ。漢を  
貶して蜀と名はゆ。先主後主と稱したま。抑誰がゐるや。理義の西ふ  
書を読むりの。ころね。とぞ。されば彼綱目小帝禪を後主とお  
ろせを。姚遂といふ博士。りそ。難をたれ。又諸葛孔明の書翰。小。  
先主と称す。あらゆ。原本より先帝とわざを。晋よ傳ゆ。先主  
と改めたり。杜徵が傳よ孔明の書を。戒よ。帝禪のとを。すな  
アマ。朝廷の主公。今年始十八とある。朝廷と称す。主公とりん  
道理。後人の加筆セシタ疑ふべからず。以上顧空武が説よ  
みたり。陳壽の家を。義祐とひいて。巴西安漢とつともの人す。  
少かりとて。譙周を師トテ。漢。官。小仕。觀閣令史とひふ職を授  
らる。父の喪小疾あり。婢ふさを丸せす。下に。郷黨の歳をう。  
これ小生をうち。累年零落ち。されども。喬張華。その方を愛して。  
孝廉小舉。一とを。佐廿者佐郎。よう。あらが。あら。三國志を携みき。

仁貞屋庫卷二

卷之四

大神宮大神樂獅舞圖說

大神宮大神樂 指舞圖說

馬を駆け出でて、猛獸を逐ひて退けとども。

まことに、  
舞の俳優なり。

物語を云む。寛永の大神宮  
御祓大神事と云ふ。毎日江戸中を徘徊

細志の事。うの鼻高の假面と云ふ。

直無と被て白襦を穿  
御幣を落して先へまきり。その次小

十五歳ぞうりの男童。瑤路と  
よみ。長絹と被て。白袴と

穿。中啓の扇と鈴と。左原

わらわあは。三番小廟上下  
きき。ききえい。りう。  
ゑくの男。翁てお。四びんは布  
ふ

衣の着未まる男。その次へ足  
付ころ丈長ちの蓋と取てある  
もねるがから

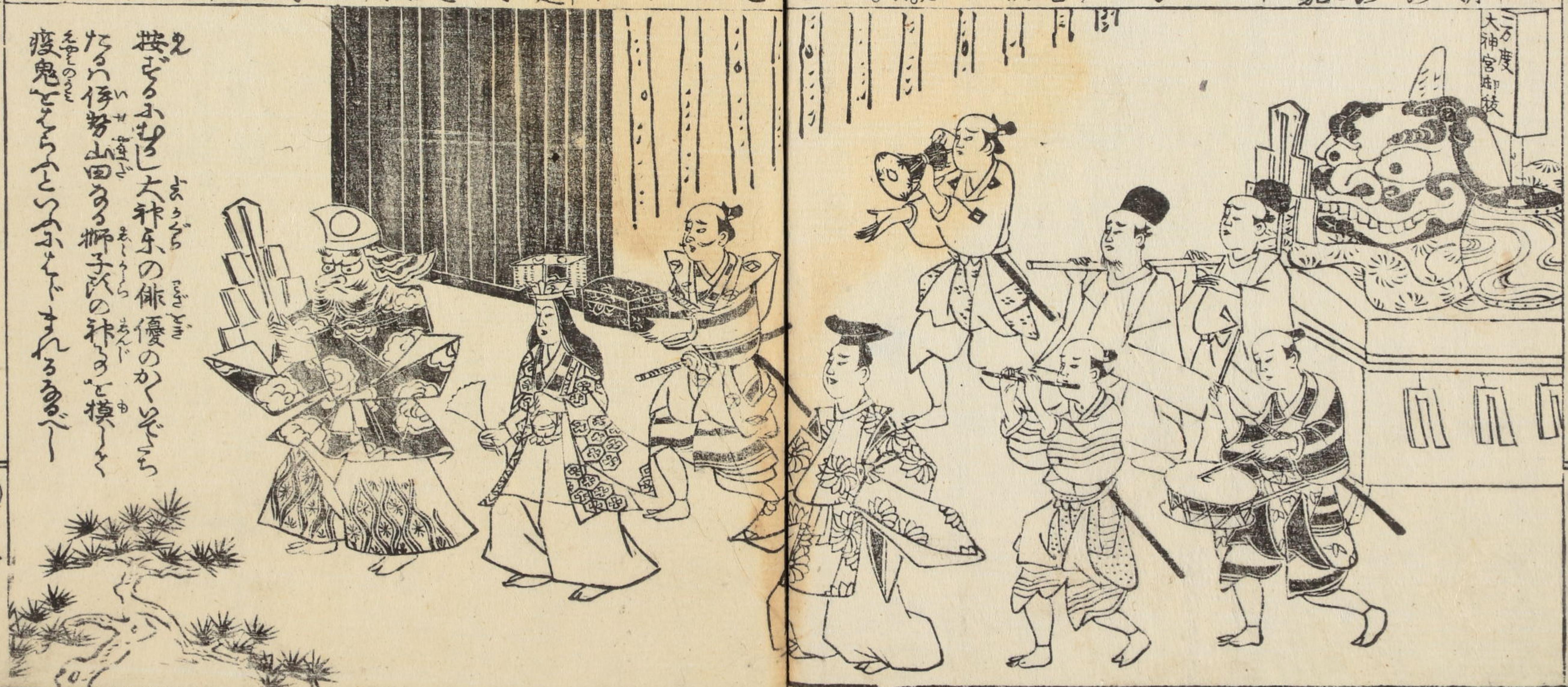
門の六十枚の表紙  
の上へ獅子の頭と

居中大鼓を打て。萬度の吉福  
とまゆゑ立て。御幣と立せよ。

四人。或へて人を。かづめの皆鳥。  
不一。き。唱子と披て。白張襷と穿。左京小

笛子笛小鼓打。小太鼓打。拍子

瑠璃の鏡  
見る男童。神乐と舞ふ。抱子



まうぢ  
まきと  
え  
安<sup>あ</sup>らぎのふむし大<sup>だい</sup>神<sup>じん</sup>乐<sup>が</sup>の俳<sup>ひ</sup>優<sup>ゆう</sup>のかくらぢ  
いたる伊勢山<sup>いせさん</sup>の獅子<sup>し</sup>子<sup>こ</sup>の神<sup>かみ</sup>を<sup>を</sup>模<sup>も</sup>す  
疫鬼<sup>えきき</sup>と<sup>と</sup>さうと<sup>と</sup>つぶと<sup>と</sup>まれるるべ

あらゆるうちから陳壽が父ハ漢の世ノ馬謾とりよりの参軍たり。小作  
の馬謾罪有りて。諸葛武侯もまことに馬謾を誅す。その罪を  
糺し。又陳壽が父の頭髪を剪切て。僅小命を助す。孔明が  
子の諸葛瞻へ常ニ陳壽を絶ざうべ。あくまでものと恨む。  
漢を亡びり。敗れ。儀ナリ。書ナシ。又孔明が傳を修む。諸  
葛亮ハ連年裏を勤め。あくまでも功す。と。武畧あり。の  
小あくまと織き。晋書。又世說新語補。紹徳の部の注。宋  
の筆。小成なり。のうんど。その文をのみ愛し。理義を曉えらざるも  
の。豈か。縱通俗ニ國志。ことも蒜んりの。正統。国。連。僭。國。の別の  
名をあるべし。正統。との。昭烈帝の。ど。僕の。帝親す。そ。終たると  
つ。魏賊を討ひ。の。國運。との。司馬氏の。魏。小代。と。天下  
を有。をり。られ。と。正統。との。ふる。う。漢の。統。を。纂。た。ま。の。ゆらね  
その奸惡の。曹操。又。子。小。荀。ら。と。され。が。天子。を。有。ふ。及。て。世上。一。日。も  
を。倒。し。曹操。又。至。そ。て。献帝。を。追。ひ。失。ひ。天子。の。位。を。纂。と。ぐ。も。全。く  
四海。を。有。ひ。故。よ。れ。を。僭。國。と。り。殷の。夏。を。代。て。立。周の。殷。を  
う。り。立。漢の。秦。楚。を。討。滅。し。立。光武の。王莽。を。誅。し。立。昭  
烈の。曹操。を。討。そ。西川。の。帝。な。だ。ら。た。ま。正統。の。天子。と。と。う。ほ。べ  
し。あらゆる。魏の。漢の。賊。あり。晋の。魏の。恩。よ。代。る。り。の。そ。ろ。の。論。ど。る  
小。名。が。だ。又。金。聖。歎。大。日。本。の。神。代。よ。百万。載。の。今。よ。至。て。草。食。  
の。時。や。萬。圓。の。中。又。有。ひ。ま。い。と。貴。近。大。御。圓。う。れ。ば。化。の。圓。み  
せ。へ。が。に。頼。朝。卿。武。家。の。棟。梁。う。じ。六十。餘。圓。の。總。追。補。使。こ。う。り。

ありて以東僅小四十余年父子三世矣。北條が執柄の世からに至  
る。北條とびうせて又新田足利とまされたくな。あつれども義貞、朝臣  
を許すとて新田殿の武臣の正統ゆく。室町を立つて國運す。  
且捕正成ゆ。誠忠す。武略よ長ト。られを孔明か對し。が  
あらと嘗らば。さるを近属京洛の大儒先生へ。孔明を嫌ひ  
ちとすんりまことの親を嘗ととづ。元人の論議の本うたるや。  
彼えへの評よ。玄徳とす。獻帝の子孫を立す帝。その身は丞相  
とあり。曹操を討ひ漢のゆゑび廢するへ歎し。孔明らの門をあら  
がる者のよあくび。あらへて玄徳を推して天子の位よ即へ。ひく真の忠  
臣といひがにとづ。程立あくか修されど。の後人机の上の議論し  
りべて。前よりいひど。昭烈帝の漢の景帝の玄孫よ。中山靖王よ  
り。あら。献帝の子孫を索て。天子よせまく。ひくも。西昌へ  
邊す。中原へ遠。あれば人を許都の敵地へ遣す。られを常ある  
ね。ひく。ある程よ。昭烈崩ぬ。誰々漢の天子ゆ。とある。これ  
孔明が推す。昭烈を。漢帝と仰ぐ。所以て。彼項梁が義帝を立  
す。楚の後と称す。と曰を同じ。論どべく。光武の玉葬を謀して。  
かく。されば高祖のれを割あふれ。正統ゆ。子孫のれを継ぐ  
又正統ゆ。されば昭烈のれを。孔明かのこても。又後世よ。一言を加ると  
あり。國史なりとあら。されば姑くり。凡軍記小競を競り。大

勢の成敗よもよひて。理義ふくろと苗ひぐ稀也。後鳥羽院のりく  
りそ北條義時を滅ぼす。世をむすびのじよ御をや。と思食ならまひよ  
くれど程ひある武士の身からぬ。北條が武運りゆきゆく、小盡ど。ひげ  
ひう一うち負ひひ。二皇みのり。遠く嶋く。辻まれゆひよクルべ集  
久記を読りの只顧後鳥羽院の。ううとちのじあくとろへつ。や  
く義時より八世の孫高時へ道が時小至て。後醍醐院湯よ後  
とそのりん こうほ 鳥羽院の心志をほざき。高時を誅滅し。むうのせよあさる  
ま。そのるよりへ起立をもふ。一旦沈落ちゆくとも。北條の武運  
を小盡ひんびく程もあ。御本意を遂め。是後鳥羽院の廢  
短く。後醍醐院の謀畠長吉をもひすりゆく。成と敗の時運  
かのものもあゆ。太平記を読りのひみづ帝の思召たちも。とあ  
り。り後鳥羽院を不まら。又後醍醐院をも不まら。べぐよも  
ひそ猿小意をとど。後も官軍へ意をもまう。只その成敗よの眼う  
ほり。理義のうぶ公つうざる故に。軍記小。後鳥羽院の義時を亡  
さんと身が石とまちゆる。龜菊が諱訴よ起れよと。ひん舉動を推  
義時をもまけたまく。の君年來武を好せ。ひん舉動を推  
量よ。ひそ身と食たらかのとのあれば。実朝公をば。諸  
位討ひ聲せんと。又祖よりこえくる。右大臣より。亦彼え人の  
議論よらひ。南朝のうへをまうさ。後醍醐院を。義貞朝臣  
を征夷大將軍。利殿を討へ。ひそ身。忠比台岳の衛を失ひ。  
親王お跡を越の雪と。寧波をば。や。身貞陣没。も。新田  
殿の子孫を大將軍。楠公の子孫を副將軍。その武威

母のづくら振ひて。牛角の合戦ひとべによ南朝の公卿らの理をばり  
あがす。先帝方ひがるにせりふど。朝家一統のせよとえと  
おもむく。親王うらじの將軍小さりありだ。かかへて南朝の  
武士の忠義も謀畧も京家の武士よ劣れども威もうる權ゆる事  
玉ぐ。衆のかりひげと見ゆうじ。果敢みてんとあひだらえ。あふ  
きしむるみどり。扇拍ふをひぐいとうと。和よ漢のヘイヒを明白  
小説諭でど。その論究わて高りんべ。呼と感まするもの稀みて婦幼を  
うけつけ。近因の新作ある。兼好法師が後然草を読むては  
ゆくありて骨くとくと和らだり。とその声と吟くあり。雄くよ對ひく  
あび。大なるゆ。柱よりみて晴るやあれば。陣大鼓の拍子ゆゑあく。舊の  
まくまくへ輾び入る。

## 第五

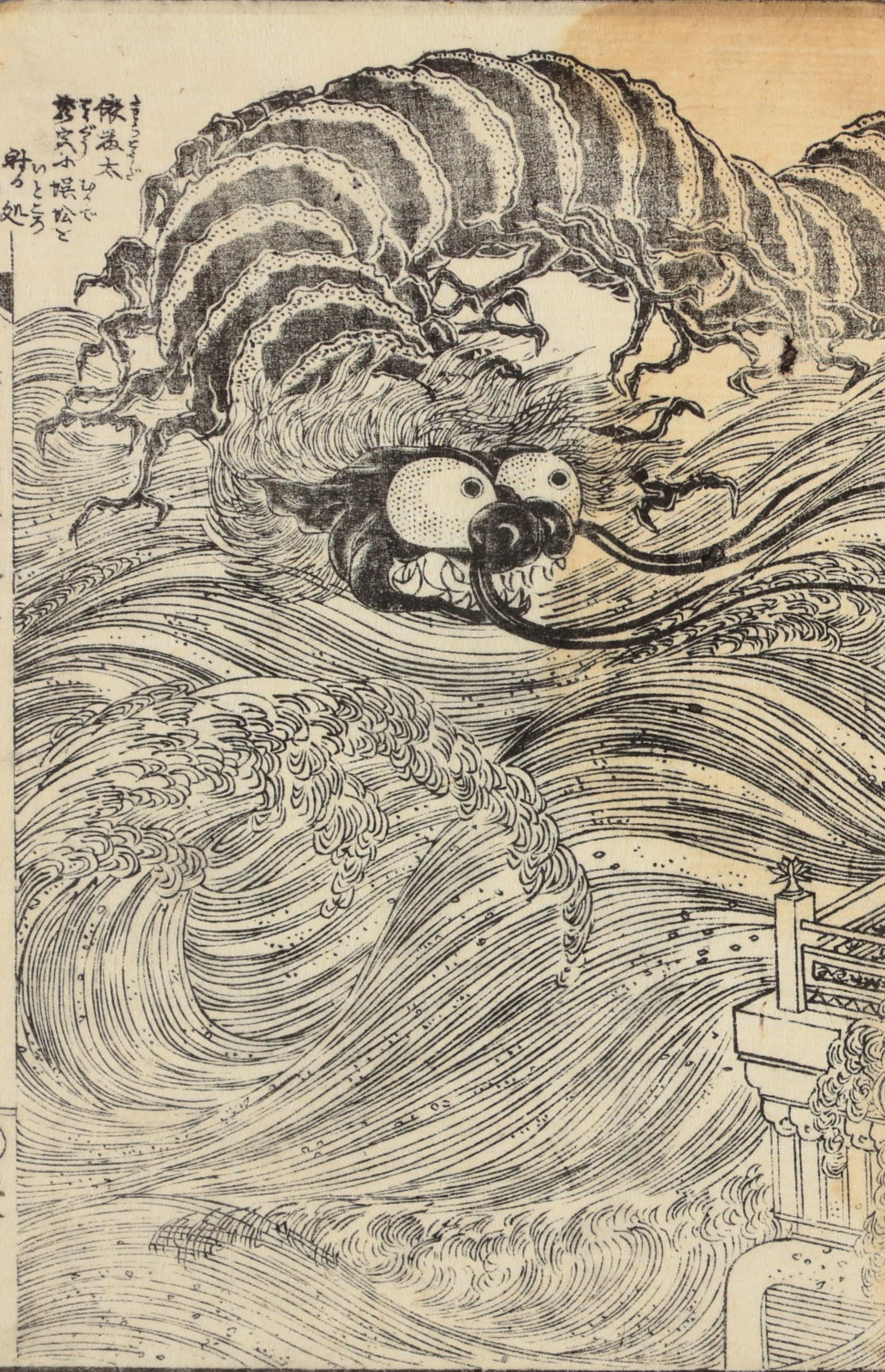
## 俵藤太龍宮入の弓袋の上

杖の次へ坐す。山へ黒くま掲きて簞書けり。馬の跡のく、高く  
見えす。俵藤太秀御朝臣。龍宮入の弓袋と一行手を守つた。その  
うち件の弓袋の管の中から跳出して左をえく。右をえく。管書附よ  
分明うれど。傳末船を失ひ。されば。すなはつゝのゆあべ。抑多く主  
と頼みた。秀御朝臣へ。世からきるん弓とをされば。のほその武勇  
を高くせんと。後人蛇足の競を添ふれどり多く傍痛させ俗の常云  
陰囊も隨重。床やのカタチによ似れども。やる圓脣小刻れば緣故を  
あらざんと。まこと頭を切る。世俗のをもくりひりともかと。怪  
えんと。まことに頭を切る。世俗のをもくりひりともかと。怪  
えんと。まことに頭を切る。首畧もくさみいさん。の書あり。義平の年間  
俵藤太秀御。只ひこう。勢田の橋を渡る。長二丈をかりて。木

大蛇橋の上より横りて臥て、秀御これを物とす。彼大蛇の背上  
を踏て、徐々に踰えられべ。大蛇忽ち小男となりて、秀御のまへ小走つ  
きのま。某年春、貴賤従来の人を試るよ。辺が如剛うすりの  
秀御一派、小も及びとほ細ひりと領議。との男を先立て。湖水乃  
浪をうなぎ、水中へ入ると五十餘町、一の樓門あり。開て内へ入るよ。  
留院の汝、金玉の鑿奇麗莊親言葉紫玉に盡されど、朱門高閣帝  
王の百石城、小さくたゞ。かくと男まづ内へ入る衣冠を整へ秀御を  
客位に請むる。左侍衛の官。がくと袖を列す。うれと歎待あど  
小酒宴既に闌め。夜の深く、篠よなれば。衆皆も歎の寄未だた  
アリ。ばかりぬとも、周章と秀御。生涯身を致さざりともある。  
五人張小せん残りけり。薺湿し、二年竹の節近みを。十五束三伏よ持  
て、簇の中根を苦本まぐらち。織へる矢只二條を手挾す。今ク。  
と祐行よ比良の高峯の、くまよ。焼松二千ぢよ。二行小燃く。中小  
鳴の如く。くるりの龍宮城をさして近づく。物のぬ体を熟視す  
小二行よ燃てる焼松。彼が左衣のまよとアライと見えたり。あづれこま  
百足の馬、蟻の化なり。とくろゆて。矢はらく。うりぐんべ。矢うち刻さ  
る。弓を立てて。矢をくへて立す。秀御。秀御。矢を射損じて。安やす  
らひ。二の矢を刺す。矢所を射す。それも又身より遠く。憑  
むとくの矢。矢を一縦ようり。小せんとぞひるが。信と案ト出  
たり。あつて。の度射し。とくろ矢頭。小唾を吐す。矢所を射

俗間性徳  
百足と馬  
蟻を螻  
小二行よ  
弓を馬  
始原本  
のまよ  
勝写

寶庫圖 卷二



さう。弓の矢の毒を塗り故ゆ。又ある矢所を二度射つてゐる  
や。この矢骨間の真中を徹して喉の下まで羽ぬら遍く。左を  
あ。二キとええる焼松も忽ち滅ぶ。鳴のとくよりきりの  
倒く音大地を響けたり。立とうとも見え。果たし百足の馬蟻へ龍  
神の力を放びて秀ノ御を生きよ歎詠す。小刀一振。巻絹一つ。  
禮一領。頭結する儀一つ。赤銅の撞鐘一つを樂す。近邊の門禁せ  
ゆく。大軍から外の景致を示す。秀ノ御都ゆく。の  
巻絹を戴てまづ。あらよは儀ハ中うつ物を取とどかづき  
まつまつ。財宝倉よ湧く。衣裳身よ餘れ。故よその名を儀  
疏をとぞいひづ。鐘の林。砌の物すねがと。ニ井手へこれをなす。ま  
ま。云々といへ。もの怪能。既よ故ゆ。とゆじふ。世俗耳熟す。怪す。此  
條の虚実。俗説辨とり。方のよ。粗載たるとあがむ。されよと只  
湖水の底よ龍王城のあべ死理うなすのと辨べ。あられふ。彼俗  
説辨をも。親ぶりのと。又りれば。吾脩の管書附よ龍宮入の事  
を加え。つべ山椒入とあらば。とて。識者の内小笑せば。されも彼俗  
我十郎の小袖よ衛を縫へたま異うべ。不破の闇の板廂へ月の漏  
を賞。貌とよ。賓客を歎詠さんと。新よ昔りえて。真を失せ。向徒  
の今も亦あれよ。さらば。龍宮城とよ。ゆきのゆき  
りべ。と。がられ。孔明が陣大鼓より。いと耳熟なる物語され。畢竟  
まほ。まほ。と。回答。或り蠟燭の真を剪。或り茶を汲てそ  
山講師を管待。と。を。と。と。

